　私たちは、東舞鶴駅から、10分ぐらいのところにある、与保呂小学校の6年生です。
　舞鶴市の東の方にある与保呂には、昔からの伝統「蛇切岩伝説」があります。
　このムービーでは、与保呂にある蛇切岩伝説について紹介します。

【蛇切岩伝説のお話】
　昔々、あるところに、「おまつ」、「おしも」というそれはそれは美しい娘が住んでいました。そこであることが起こりました。詳しくは、絵本を読んでみてください。マップも作ってみました。ぜひ行ってみてください。

令和７年度与保呂小学校　６年生

蛇切岩伝説

目次

場所について…２Ｐ
登場人物紹介…３Ｐ
第一章　おまつの恋…４Ｐ
第二章　両親からの縁談話…６Ｐ
第三章　おまつとおしも…８Ｐ
第四章　大蛇のせいで…９Ｐ
第五章　大蛇の真実…１１Ｐ
そして…１２Ｐ

場所について

東舞鶴駅

- 多門院の黒部
  車：25分　徒歩：3時間18分
- 蛇切岩
  車：12分　徒歩：1時間30分
- 日尾池姫神社
  車：11分　徒歩：1時間16分
- 大森神社
  車：4分　徒歩：10分
- 堂田の宮
  車：6分　徒歩：28分

登場人物紹介

おまつ　十八歳の姉
「やまと」と恋に落ちる

おしも　十五歳の妹

父親　姉妹の父親

母親　姉妹の母親

やまと(仮名)「おまつ」と恋に落ちる

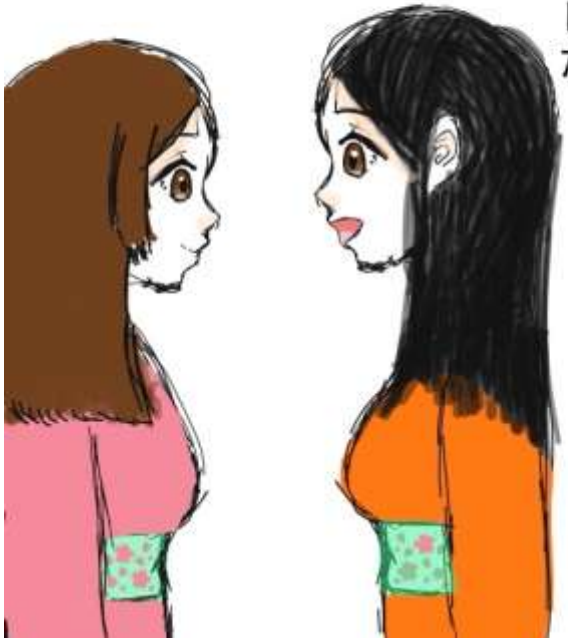
若者三人　「おまつ」のことが好き

村人三人　村に住む人たち

第一章　おまつの恋

この与保呂から山一つへだてた所に、多門院の黒部というところが、今もあります。

昔、その多門院の黒部という村に「おまつ」「おしも」という、それはそれは美しい姉妹が住んでいました。二人とも気立てが良い上に器量もよく、村を超えて評判になるほどでした。



二人は、毎日家の仕事を一生懸命に手伝いました。そして、今日も夢中でたきぎを拾っているうちに与保呂の山の池のほとりまでやってきてしまいました。

「姉さん、私、あっちの方へ行って、もっとたくさんたきぎを集めてくるね。」

「おしも。池にはまらないように気をつけなさい。この池が深いって村の人も言っているのだから。」

「分かってる。じゃあ、あとちょっとだけ。」

姉のおまつが、一息つこうと、体を起こすと、そこにはたくましい若者が、おまつの方をじっと見つめていました。

「なんて美しい娘だろう！」

「なんて素敵な方なのでしょう！」

このときおまつと若者はお互いに一目で恋に落ちてしまったのです。

「姉さーん」
「たくさん集まったよ。姉さん帰ろっか…あれ？姉さんどうしたの？」
「……」
「姉さん？」
「あ、ううん、何でもない。さぁ帰ろう。」

第二章　両親からの縁談話

お互いに忘れられない存在となったおまつと若者は、家族には秘密で、二人きりで会うようになりました。

しかし、おまつも年頃のむすめ。ある日、そんなこととは知らない父親から、縁談話を持ち出されたのです。

「おまつ！待ちなさい！おまつ！」
「いやだ！私、嫁になんか行きたくない。」
「なんでだ！お前とめおとになりたいと、これまでにもいろいろな方から縁談の話があった。みんな立派な若者ばかりだ。」

「おまつさん！私とめおとになってください！」
「いえいえおまつさん、性格なら私が一番です！私とめおとになってください。」
「いえいえおまつさん、顔なら私が一番綺麗です！私とめおとになってください。」
「私がめおとになるんですよ！！！」
「絶対にありえません！私がめおとになるんです！！！」
「ちょっとお松さんの話を聞きましょう！私が一番話を聞いていました。なので私とめおとになりますよね。」
「そんな、いくらお父さんがいいと思っても、私は…私は…その方たちの誰ともめおとになるのは嫌です！」
「えっ！？」
「そんな……」

「おまつ！待ちなさい！」
「おまつ！どうしたの…あの子らしくない。どうして…」

昔、娘の嫁入り先は親が決めるものでした。おまつは親思いの優しい娘でしたから、とても心を悩ませたに違いありません。

第三章　おまつとおしも

　それからもおまつは、父親の言う縁談話には耳を傾けずに、今日もあの若者のところへ行こうとしました。
　しかし、この日は、姉のおまつを心配したおしもが、こっそりあとをついて来ていたのです。
「おまつーすまない。おそくなったー！あれっおまつは？あ良かった。まだ来ていなかったか。」
「ごめーん！待った？」
「全然待ってないよ！行こっか！」
「うん！」
「姉さん！これは一体どうゆうこと！？なんで…？」
「おしも！なんでここに！？」
「おまつ！すまない、また後で！」
「えっ！？ちょっと待っ…」
「どういうことなの…姉さん。」
「……おしもが見た通り、私は彼の方とめおとになりたいと思っているの。私はもう、家には戻らない。」
「ダメ！」
「私はあの人のところへ行く！」
「ダメ！姉さん！勝手に決めたりして…お父さんが許すはずがない。お母さんも悲しむよ。幸せになれるはずがない。一緒に家に帰ろう！」
「放して！家には帰らない！」
「うわあぁっ！」
「姉さん！！姉さーーん！！！あぁどうしよう…」
　おまつを家に戻そうとおしもが引っ張り、その場を離れようとおまつが引っ張っているうちに、おまつが池に落ちてしまいました。

第四章　大蛇のせいで

　おしもは、急いで家に帰り、父親に全てを話したのです。父親は、おしもの話を信じることができず、おまつを助けるために池のほとりへ飛んできました。
「おまつ！どこへ行った！お前の気持ちはわかった。」
「おまつ。出てきて。一緒に帰りましょう。」
　その時、池の中から大きな大蛇が現れたのです。
「な、なんだこの化け物は…！？た、助けてくれぇーー！！」
「父さん、母さん、おしも。…悲しい…悲しい……」
　それから、この大蛇がたびたび村を襲い、人々に大きな被害を与えるようになりました。
「おーーーーい！！！大変だーーー！」
「どうしたどうした！？そんなに焦って！」
「ま、またあの大蛇が来やがった！こっちへやってくる！」
「なにぃ！？早く逃げろ！」
「たっ、助けてくれー！」

その後、村を荒らし、大蛇は去っていきました。
「わしの大切な田んぼや畑が無茶苦茶に…これから収穫って時に…！」
「うわぁぁ！家も無茶苦茶にされてしまった……」
大蛇が現れるたびに、村はひどく荒らされてしまいました。
そこで、村の人たちは、こんな話を始めました。
「あの大蛇のせいで村は大変なあれようだ。」
「大蛇のせいで、わしの大切な畑が無茶苦茶にされてしまった。」
「わしは、大事に飼っていた馬を丸呑みにされてしまった。」
「あの大蛇に暴れられては、わしらは生活ができない。命も守れない。」
「なんとかヤツを退治できないものか……」
「う～ん……」
「そうだ！もぐさで牛の形を作って、それにたっぷり火をつけたらどうだろう？」
「そうか！大蛇に本物の牛と間違えて食べさせるのだな！」
「そうだ、それがいい！」
「天才だなー！」
「ようし！早速作り始めよう！」
村の人々にもぐさの牛をたくされた村人は、大蛇の住む池のほとりへやって来ました。
「これが大蛇の住む池だ！村のみんなの仇だ！」
『それぇ』
もぐさの牛を見つけた大蛇は、一口にそれを飲み込み、苦しんで、もがき回りました。大蛇が暴れると、嵐が起き、池の水が溢れ、大蛇と共に、洪水となって押し寄せました。
焼け死んだ大蛇は、川下の大きな川に突き当たり、大きな体は、三つに切断されてしまいました。

第五章　大蛇の真実

「やった！大蛇をやっつけたぞ！」
「これで、また安心して暮らせるな！」
「でも…あれは、きっとおまつ姉さんだと思うの。」
「えっ！あれがおまつだって！？それなら…ああ…わしらはなんてことをしてしまったんだ…」
「あれがおまつだったなんて……そうだ、ここに神社を建てて、おまつの悲しみや怒りが静まるように魂をまつろう。」
「そうしよう。」

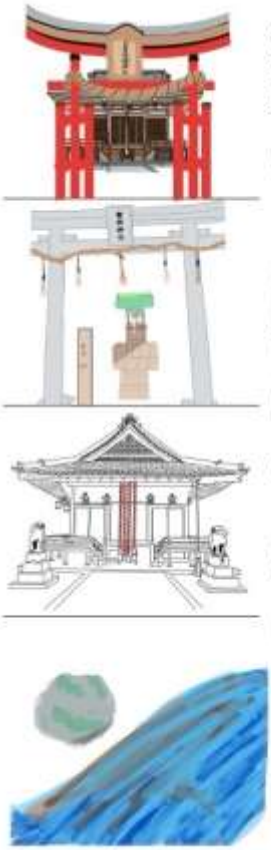
そして…

こうして、人々は三つに切れた大蛇の頭の部分を〈日尾池姫神社〉に、胴体の部分を〈堂田の宮〉に、尻尾の部分を〈大森神社〉にまつりました。

そして、この大蛇を三つに切った岩を〈蛇切岩〉と呼び、今も大切にまつられています。〈蛇切岩〉は与保呂の水源地の奥にあります。

そして、〈日尾池姫神社〉も〈堂田の宮〉も、〈大森神社〉も、なぜか松の木を植えても育たないのだそうです。

暴れ川だった与保呂川は、今は繰り返し工事され、危険な川ではなくなりました。でも、大雨が降るたびに思い出してください。この川が、昔多くの村人を苦しめてきた川だったことを。そして、昔の人が語り継いできた《蛇切岩伝説》のことを思い出してください。



2026年3月発行

{著者紹介}

R. I
M.Y
Y. H

2026年与保呂小学校
絵本制作部

{サポーター}

S.T
T.T
K.T